
等価交換の世界の中で

FATE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

等価交換の世界の中で

【Nコード】

N0493J

【作者名】

FATE

【あらすじ】

聖杯戦争で過去の自分との戦いによって答えを得たアーチャーは、新たな世界で自分の理想を再び貫く。錬金術の世界でどんなことを思い、貫くのか？そんな話です。

プロローグ（前書き）

つい出来心で書いたもので初めての作品です。

支離滅裂な文章だと思いますので、ご注意ください。

望まれないのなら、一話だけで終わろうかなーと思っています。
すみません。ではどうぞ。

プロローグ

魔力で構成された肉体が光の粒子になり消えていく中でアーチャーの心は満たされていた。

凜の泣きそうな顔を見たが、あの【衛宮士郎】が自分の理想を曲げない限り大丈夫だろう。

あの>>正義の味方になる<<という理想を。

そう考えると少し羨ましく感じる部分がある。

なにせ、自分はこれからも守護者として

世界の奴隷として殺戮を繰り返さなければいけないのだから。

しかし答えは得た。

自分のルーツと違う【衛宮士郎】との戦いは、自らの内に答えを再び与えてくれた。

磨耗した心は、あの遠き日の答えを。

己が貫くと決めた【答え】を得た。

人を守る事。あの笑顔を守る事。それだけは間違っていないかったのだという事を。

ならば、この身もその想いだけは魂に刻み込もう。

そう思いながらアーチャーは意識を暗闇へ落して行った。

「んっ」

次にアーチャーの意識が戻ったのは真っ白な空間の中だった。
いや、それには語弊があるだろう。

その空間の中にも唯一つ扉があるのだから。
かなり大きく所々に謎の模様がある。

「ここは・・・、つつ誰だ!？」

後ろに人の存在を感じ、振り返ると……そこには真っ黒な人型のナ
ニカがいた。

「くっ!？」

人は得体の知れないものを見たとき一瞬戸惑ってしまうことが普通
だが、アーチャーはそれに危険なものを感じとつさにバックステッ
プして距離をあげた。

「何だ、コ「ようこそ!!」
【正義の味方】 歓迎するよ」……この
身をその呼称で呼ぶか……」

答えを得た今、その呼称で呼ばれて怒ることはないが、どうもコレ
に呼ばれると揶揄されているような気がする。

「……お前は一体何なんだ？」

何にしても今現在で最も優先すべきなのは情報の整理だ。
聖杯戦争で敗れたこの身は本来、座に戻るハズ……

それらも含めてここは、この存在から今の状況についてのできるだけ多くの情報を得たい。

「よくぞ訊いてくれた！　オレは人が一般的に言う　世界　という存在。あるいは　宇宙　、あるいは　神　、あるいは　真理　、あるいは　全　、あるいは　一　。そして、オレは　お前　だ」

「何？　……なっ！？」

この人型のナニカが謳いあげるようにセリフを述べ、そして私に指を指したとき、そのナニカの顔が自分の顔になった。

「……どういうことだ？　お前が<世界>というなら、なぜこんな状況をもたらした？」

「いや、お前の言う<世界>と俺は少し違うな。お前はこの世界の者ではない」

「……？　どういうことだ？　まさか、並行世界というのではあるまいな？」

そうだとしたら私は第二魔法を体現したことになる。

この魔法を現時点で体現できる人物はキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ、<魔道元帥>　<万華鏡>　<カレイドスコープ>　<宝石のゼルレッチ>などの多くの通り名をもつ真正正銘の魔法使いのただ一人のハズだ。

……それにこんなにあっさりと体現されたら、凜が怒り狂うかもしれないな。

「いや、そもそもこの世界」の定義が違っただよ。この世界にはお前の知っている「世界」は存在しない。結構似ているかもしれないが、この世界は並行世界じゃなくて、いわゆる異世界だな」

……まさかそうくるとはな。

生前も守護者になってからもそんな存在は聞いたことないな。

いや、摩擦された記憶の中でも私は戦場にほとんどいたはずだから一概には言えないかもしれないが……

「それを信じろと言うのか？　今の現状ではお前の妄言という可能性の方が高い」

「おいおい、何もそんなに警戒しなくてもいいだろう。それに、分かっているはずだぞ？　今、お前がココにいる、それが証拠だと言うことを」

……そう、コイツの言う通り本来ならば世界の守護者を呼びだし維持するには聖杯戦争のような大規模な魔術儀式が必要となる。

しかしココに来るに渡って魔術が行使された形跡はなく、コイツにも魔力なんて物は一滴も内包されていない。

それに何よりこの身は魔力で構成されているのではなく、完全に肉体として確立している。

簡単に言う这世界とのリンクも切れて、「生き返っている」のだ。

このような現象から言って、コイツの言うこともあながち妄言とは言えない。

しかし、そうなら疑問が浮かぶ。

「仮にそうだとしたらどうやってこんな事を起こせた？　そしてなぜ私をここに連れてきた？」

そう、コイツに魔法ともいえる事まで再現してまで私を呼び出す理由があるのかということだ。

「まあ正直言うと俺が狙ってお前をココに呼んだわけじゃない。俺はただ扉を開いただけだ」

「扉？　この扉かね？　……私には心当たりがまるでないのだが」

第一、私は聖杯戦争に参加していたのだ。このような扉とかかわる機会などあるはずがない。

しかしコイツじゃないとするなら一体どうやって……

いや、待てよ……

「しかし狙ったわけではないのならどうして私の事を＜正義の味方＞と呼んだ？　それに私には生き返れるような手段はない」

そう、私がエミヤシロウだったころの理想をなぜコイツが知っている？

「クックツ、いや何、魂が形をもった状態であつたのでな、少し覗かせてもらったただけさ。それに、人体錬成のようなことをするのに一番大事なものは魂だからな。

こんなに面白い魂をもつやつは久しぶりだったから、魂の輪郭に沿って復元してみたまでだ」

錬成？ よく理解はできなかったが、コイツに私を知られているのは確からしい。

しかし、伊達に世界を名乗っているわけではない。死者蘇生など既に魔法の域だ。

「それで、私を生き返らせてどうする？」

そう、私を生き返らせて現状コイツにメリットはない。ならば今から何かをすると考えるのが普通だろう。

「クツクツ、話が早くいな。まあ俺は世界を名乗っているからな。基本、向こうから来るやつ以外にはこの世界のやつには不干渉なんだよ。しかし、お前は違う。お前は俺の世界の者じゃない。よって、俺は何をしてもいい。だろう？ 正義の味方」

「……無茶苦茶な理論だな。しかし私を世界から逃してくれたのだから、できる限りのことはしよう。」

あのく世界への奴隷として殺戮を繰り返さなくていいのだ。私にとって許容できることなら何をしても軽い。

「なら簡単だ。俺はお前というイレギュラーの入った世界を見たい。安い事だろう？」

「……それだけでいいのか？ 私の行動を強制したりはしないのか？」

「いや、あえて言うならその魔術回路をある程度もらっていく。その力はこの世界に過ぎた力だからな」

「……いいだろう。しかし先ほどお前の言っていた錬成とはなんだ？ この世界の力ではないのか？」

このような存在もいるのだ、この世界にも何かしらの力があると考
えていいだろう。

「確かにこの世界には錬金術というものがある」

錬金術？ 私の世界にも錬金術師を名乗るものならいたが、それと
はまた違う印象を受けた。

「心配するな。魔術回路をもらっていくんだ、あと少しの代償でく
見せてやるよ」

「？ 一体何を……、つな!？」

奴がそう言い終わると同時に後ろにたたずんであった扉がゆっくり
開いた。

その中では言葉では言い表せられないような黒い影に多くの目がう
ごめいていた。

その存在はまさに異様としか言いようがなく、どこか世界を名乗る
コイツに良く似た感覚を覚える。

「何だ、これはっ!？」

そしてその影が何本もの手となって私の体を捕らえようとしてくる。
とつさに干将・莫耶を投影して撃退しようとするがなぜか魔術行使
ができず逃げることしかできない。

「どういつことだ！　世界！」

「往生際悪いぞ、正義の味方」

楽しそうに笑いながら世界がそう言うのを見ながらついにその手につかまってしまい、扉の中へと引きずり込まれる。

「この世は等価交換だろ？　正義の味方」

扉が閉じる前にそう世界が言うのを聞きながら、頭の中に莫大な情報をつぎ込まれ、私は意識を闇に落した……

プロローグ（後書き）

へたくそですが、感想できたらお願いします。
あとアドバイスくれたら幸いです・・・

第一話 状況把握（前書き）

またやっつけてしまいました。

この下手くそな文章では原作を汚してしまいそうです。
どうか注意して読んでください。

第一話 状況把握

- - - 等価交換 - - -

人は何かを得ようとするとき、同等の対価を支払わなければならない。

それは、どんなに些細なことでも同様である。

例えばスポーツひとつをとってもそうだ。うまくなろうとするのなら、

トレーニングをしたり練習したりする、努力や時間という対価を払わなければならない。

お金を得る時も、友を得る時もすべて同様である。

ならば、善を語る正義の味方でさえそれは同じことだといっていいだろう。

善を救うのなら、悪を切らなければならない。

人は何かの代償なしに何も得ることはできないのだから。

「くそっ！」

四方八方何もない、荒れ果てた砂漠でアーチャーは意識を取り戻した。

世界もとい真理に出し抜かれたのが、そんなに気に障ったのか少し不機嫌である。

「……やってくれる」

頭が痛む。

どうやら私の魔術回路に制限をもたらすかわりにあの扉の中を見せたようだが、短時間にあの膨大な量の情報をつぎ込まれるこっちの身としては笑いごとではない。

気が弱い奴だったら精神破綻を起こしそうなくらいのものだった。

「しかし、あれが真理か……」

まだ頭は痛むがそれで得たものは多い。そして、

「＜錬金術＞、か……」

この世界特有の力。

物質の構成や形を変えて別の物に作り変える技術。

錬成陣と呼ばれる魔法陣のような物にエネルギーを流すことにより術が発動する。

その基本は等価交換であり、無から物質を作り出したり、性質の違う物を作り出すことは不可能。

その物質の構成元素や特性を理解し、物質を分解、そして再構築するという3つの段階を経て完了するというもの……

だがあの真理には両の手の平を合わせる事で円を作り、自分自身を錬成陣に見立てて錬成を行い循環された力で脳内に構築した式を伴い自然現象に干渉するべきがあった。

私も真理を見たことにより、知識はあるが……

「……なるほど、これが錬金術か」

実際に頭に構成を考え、両手を合わせて地面にてをついたところで、術は成功し、地面にあった砂から器を作ることに成功した。しかし実際知っていてもできることには驚いた。

「しかし、私ではなんとか使えるというぐらいのものか……」

そう、今あっさりと成功したように見えるが実際十センチぐらいの器を錬成するのにもかなりの集中力を使った。

どうやら錬金術というものは仕組みが高度な理論に基づいてできているだけあって、学べば誰でも使えるという物ではないらしい。

さらに、仮に使えても術者の力量に寄る面が大きく、高度な術式を使うことは難しいようだ。

「やはり私は何をしてもしも二流か……」

わが身ながらすこし惨めになるが、とりあえず現状を確認しなくては。と思いなおし自己の中に潜り込み呪文を呟く。

「――
トレース・オン
同調、開始」

肉体年齢 - - - - - 二十一〜二十二歳。

身体機能 - - - - - 正常。しかし魔術による急な強化には耐えられるかは不明。

各内臓 - - - - - 正常。

精神状態 - - - - - 正常。

魔術回路 - - - - - 二十七本稼働。しかし、すべての魔術回路に対する魔力の許容量・流動速度の低下。

とりあえず、魔術行使して自分の状態を確認してみたがいつもよりかなりの魔力がもっていかれる。

やはり、魔術のないこの世界でのある程度の修正は世界も怠らなかつたらしい。

宝具の投影・真名解放をするのもかなりキツイ。

それに、身体機能は正常だが強化に耐えられるかは不明か……

それに何か違和感あるかと思えば全盛期の頃よりもすこし若返っている。

「そういえば、アイツは魔術回路の制限と少しの代償とで引き換えと言っていたな」

どうやら、その部分が体に影響していると判断した。

それにアイツは私の体を再構成したと言っていた。その影響かもしれない。

「しかし、特に気にしなくてもいいだろう。……それよりココは何処だ？」

周りには砂漠が広がっている。無限に広がっていきそうな感慨も受けるが、

長時間ココに居続ければ私といえど危うい。

どうにかして人のいる場所にたどり着きたい……

「ふう……、とりあえず歩くと……なに？」

ココからの道のりを考えると自然とため息が出た。

しかしそんな憂鬱な気持ちを押し殺してこの現状を打破するため、歩き出そうとしたところで砂漠の丘の向こうに煙が見えた。

眉間にしわが寄るが、そんなことを気にするわけもなく煙について考える。

「あの煙は……？ あれは風で砂が舞ったものではなく、何かが燃えている色だ……。火事か？」

とりあえず、自分の中で答えをだし考えることを中断する。

「何を考えることがある？ ここは急いで行くべきだろう」

そう、自分がまた正義の味方という理想を追うのならばこんな所で考え事をしている場合ではない。

そう結論ずけて、私は煙の立つほうへ足を速めた。

心に言いような不安を感じるのを無視して……。

ここに一人の少女が居た。

いや、少女と言うべきか女性というべきか、どちらにしろちょうど大人になりかけぐらいのまだ幼さを少し残した者である。

しかし、その歳の女にしては似合わない点が多くある。

まず青い軍服を着て、人を殺すための兵器である銃をもっている点だ。

軍人であるのだろうか？

次にこの女の居る場所だ。燃やしつくされ、破壊されつくされた街の塔の上から銃を覗かせ静かに殺すべき敵を狙っている。

最後にその眼だ。眼は虚ろで絶望したような感じを受ける。
それでいて、生にしがみつき敵を狙っている鷹の眼のようである。

「……」

女は思う。

私はなんでこんな所に居るのだろうか？

大いなる力は多くの人々に幸福をもたらすものだという父の言葉を信じていた。

鍊金術は人に夢や希望を与え、軍はこの国の未来を守るものだ……
そう信じて士官学校に入ったのに優秀だからといって戦場の前線に連れてこられた。

なぜ軍人は守るべき国民を殺しているのだろうか？
私達

人に幸福をもたらすべき鍊金術がなぜ人殺しに使われているのだろうか？

民族が違うから？信じている神が違うから？ 同じ国の人間なのに……。

「つつ！」

また一人、殺してしまった。

もう戦場コウに来て何人殺したかも忘れてしまった。
人を殺すことに慣れすぎた。

私だけではない。この戦場に来ている何万もの人間が互いに殺し、
殺されているのだ。

そして、また……

「あれは……」

子供がいた。

この子供も殺さなくてはならない褐色の肌の民族の子供だ。その近くには味方の兵士が居てその子供に笑いながら詰め寄っている。

たまにいるのだ。ココで快樂殺人者になってしまう兵士が……。

私は心の中で絶望しながらも、もうすでに慣れてしまった行動に移る。

銃についているスコープを覗き、相手の頭に照準を合わせる。

この兵士に苦しめられて殺される前に頭を狙い撃つのはできるだけ苦しまないように、一瞬で殺すためだ。

これが偽善だなんて分かっている。どんなコトをしようと自分も人殺しなのだ……

そう思いながらも心の中でこれから殺す子供に謝りながら引き金を引こうとした……

「……なっ！」

しかし、私が引き金を引こうとしたところで、その子供の所に一人の男が飛び出してきた。

子供の肌の色よりかはいくらか薄いがまたこれも褐色の肌の色をしている。

私はその子供の近くに居た味方の兵士をすぐに確認するとその兵士は死んでいるのか、気絶しているのか近くに倒れていた。

一瞬動揺してしまったが私は気持ちを切り替えて男に照準を合わせ

うとスコープを覗きこんだ……。

「えっ!?!」

今度は驚きすぎて、スコープから眼をハズしてしまった。
なぜならここから男と目が合ったのだ。

ここから男まではかなりの距離が開いていて隠蔽物も多くある中
だ。

しかし、私がここまで動揺したのはそれだけの理由じゃない。

その男の目だ。この戦場という場所ではなかなか見えない悔しみな
がらもそのまっすぐな強い目。

そんな目に見られて、今の私は男と目を合わせることができなかつ
た……。

次にスコープを覗いたときその男が子供を連れて街の外に走り去つ
ていくのが見えた。

そのことに自分の失態を悔みながらもどこかホッとしている私が居
るのも分かった。

「できることなら、あの二人が逃げ切れますように……」

私、くりザ・ホークアイ>はイシユヴァールの戦場でそんなことを
呟きながら、再び銃のスコープを覗きこんだ。

少しの安堵と大きな自己嫌悪を心に残して……

第一話 状況把握（後書き）

すみません。正直この文章でいいのかなあ？って思っています。もうやめたほうがいいのかないながら・・・感想よろしくお願いします。あとアドバイスもできたら是非。

第二話 新たな決意（前書き）

もういろんな意味ですいません。

この話は特に！ 自分の伝えたいことも全然伝えられないし、文章もへたくそだし、途中ものすごく飛ばしているし、でも進行速度は遅いし、文字数も少ないし……

それでも良いという方は、いろいろ注意して読んでください。

第二話 新たな決意

アーチャーは今歩いていた。

無限に広がっているように錯覚するほどの砂漠である。

周りには砂があるばかり。そして、真上には太陽がさんと輝いている。

時刻はちょうど真昼くらいであろうか？

ちょうど太陽が真上に輝いている。

それにここにきて、気温が更に上昇したような気がする。

この壮大な砂漠を淡々と歩いていると、人間というものの小ささが嫌にでも思い知らされるようだ。

だが、アーチャーはこの険しい砂漠でも決して音をあげようとしな
い。

それもそうだろう。この程度の気候状況で音をあげるような鍛え方をしていないし、それにこの状況より厄介なことなんて生前、何度でも経験してきたのだから。

しかし今、アーチャーは少し困っている。

その原因は背中に背負われている一人の少年だ。

褐色の肌に赤い眼。この砂漠で生きている民族であると思われる。

歳はまだ10歳にもなっていないだろう。身長もそれほど高くなく、かなり幼い顔つきだ。

アーチャーも情報整理は冷静に行えたのだが、

「……」

先程から何も喋らないのだ……

目は虚ろでじつとどこかを眺めている。

しかし目元は泣きはらした跡がありこの少年が元々こんな性格であるとは考えにくい。

アーチャーは必死にこの少年の対応を考えながらも、これまでの出来事を思っていた。

この少年は先程、一人の兵士から救い出した少年だ。

この世界にきてすぐに発見した煙の発生場所には、街があった。いや、あれは街というよりも廃墟と言ったほうが正しいだろう。

街の壁や家は、燃やされ、破壊され、何よりも街道にはその街の住人と思われる人たちが数え切れないほど倒れていた。

アーチャーはすぐに倒れている人たちの息を確認して回った。

まだ息をしている人はいないのか？ そう思いながら歩き続けた……

——しかし、現実は無常だった。

その場に倒れている人たちは、あるいは撃たれ、あるいは切られ、体の部位が欠落していたりなど、皆殺しにされていた。

アーチャーは後悔した。

自分をもっと早く目が覚めていれば、もっと早くココに来ていれば、この人たちは死ななくてもよかったのかもしれない……

そう思った。

だが、誰も救えなかった事を悔やみながらも生きている人を探し続けた。

そんな時、やっと見つけた人間がこの少年であつた。

しかしこの少年もまた、一人の兵士に襲われていた。

それを見たアーチャーは熱くなりかけた思考を押さえ込み、その時何が最善かを素早く判断しようとした。

——だが、そんなことを考える必要などなかったのだろう。
体は脳が判断する前に行動を開始していた。

少し前まで自分自身のあり方を否定していた男だと言つても、死ぬまで治らなかつた性を押さえ込むことなどできなかったのだろう。
すぐに兵士の背後に回り込み、首筋を殴り気絶したところでこの少年を助け出したのだ。

まだ一人狙撃手がいたのだが、アーチャーが睨むと予想以上に動揺したので、その隙について逃げ出してこれたのだ。

そして助けたときから黙っている少年なのだが、さすがにこのままではいけないと意を決し、その少年に話しかけた。

「すまないが、何があつたのか話してくれないか？」

私は未だになにも喋らない背中の少年に話しかける。

まずは自分の事を話してもらうことで少年の気を紛らわそうと考えたのだ。

「……」

——しかし、その計画は失敗した。

それも当然であろう。この少年は周りの人間が死んでいく中で一人、生き残っていたのだ。

それにこの歳の少年だ。こんなことを聞くのは酷だろう。

私は生前、こんな子ども達を何度も見ている。

この少年のように親しい者達がいなくなり、自分だけ残った。いや、残ってしまった……。

そんな現状に呆然とし今、何故自分が生きているのかさえも考える事ができなくなるのだ。

戦いの後に残るのはいつだってこのような変化だけだ。

——それに私自身もそうだった。

自分が幼少の頃、第四次聖杯戦争の余波によって自分の住んでいた街が全て火の海になった。

そんな中、生き残ったのは自分唯一人だけだった。

誰もいない街で、周りの家が崩れたことによってできた瓦礫を見ながら、何かを探しているかのように呆然と歩き続けていた。

自分だけ生きていることに対して、周りの瓦礫に埋まった人々が、怨念を抱いているようにも思えた。

しばらくして、自分は歩き疲れて地面に倒れながら空をぼんやりと見上げていた。

自分もまた死ぬのだろうか？　と思いながら。

しかし、そんな時、助けてくれたのが切嗣だ。

あの時の切嗣の顔が浮かぶ。

自分を見つけた時に本当に安心したような顔を見せ、自分を抱き上げてくれた。

その時切嗣はあの事故を起こした事に後悔していたのだと、後から知ったのだが私の中での切嗣への気持ちは変わらなかった。
あの時、私は本当に救われたのだ……。

ここで切嗣は私の中での真正正銘、【正義の味方】になった。

「無理にとは言わない、だがそうしては何も変わらない」

だがこのままでは私はこの少年を救えない……そう分かっていたからこそ私は再度この少年に話しかけた。

「……父さんが、殺された……母さんも知らないうちにいなくなつて、みんないなくなつた……」

「……」

「もうイヤだ……。みんないなくなつたのに何で僕だけ……」

少年は呟くように話す。自らの胸に溜め込んでいたものを全て吐き出すように。

「——君は、生きたくなかったと言うのか？」

私は問う。自分の救った者、たった一人だけ、救えた者に。

「つつ……一人は嫌だ、イヤだよ……」

少年は絞り出すようにそう呟き、その目にはうつすらと涙がにじみ出ている。

——私はここで既視感を覚える。

確かこんな事が生前にもあった。

私は生前、より多くの人間を救うことだけを考えていた。

その中には救った人の感情なんて無視した時もあった。

命を救うだけで心を救わないのだ。

それでいいと思っていた。より多くの命が救う事だけが最も正しいと。

今でもその気持ちに変わらない、だが私は……

——この少年を救いたい。

そう思えた。……ならば、この身がすることはただ一つ。

「私は、君に生きて欲しい」

「……えっ？」

「君は一人だと言ったな？　だが私は君に生きて欲しいと思っている、君を救いたいと思っている」

「なんでっ？　アンタには関係ないじゃないか……」

関係ない。

そう言われてはしょうがないだろう。

しかし、私にはこの問いに答える必要がある。たった一つやっと見つけた答えが……

「あるさ……私は、【正義の味方】だからな」

そう自信をもって答えた私は少し滑稽だったかもしれない。

人によっては、私を馬鹿にして嘲笑するかもしれない。

だが、この少年は私の答えを聞いて少し呆然とした後、泣きそうな顔で笑ってくれた。

さて、これからどうするか……そう思いながら私も少し笑った。

「ここが、カンダ地区か……」

あれから少年にも元気が出始め、今の状況について話し合い情報を整理した。

その話し合いによって得た情報によるとこの少年の民族はイシュヴ
アール人というらしい。

この砂漠で生きている民族で、褐色の肌に赤い目が特徴でイシュヴ

アラ教という宗教を信仰している。

そしてイシュヴァール人達と対立をしていた方はアメストリス人といって、アメストリス人がイシュヴァール人の子どもを銃殺したことによってこの争いが始まったらしい。

そして今のところの目標は近くの街を探すことだったのだが、少年の案内でこのカンダ地区という区域の街にたどり着いた。

「うん。前に父さんの手伝いで来たことあるから確かだよ」

「ならば、とりあえず君のお母さんを探すとするか」

「うん！！」

この少年の父親はもう亡くなっているそうだが、母親はまだ分らない。

もしかするとこちらの街に逃れて来ているかもしれない。

この少年の笑顔を見ると生きていて欲しいと心から思う……

「むっ？ あれは……」

少年の母親を捜し歩いているうちに診療所のような場所を見つける。そこにはこの少年の母親もいるかもしれない、そう思って近づくとイシュヴァール人らしくない白い肌に金髪の夫婦が白衣を纏ってそこにいた。

……どうやらこちらに気づいたようだ。男性のほうの話しかけてきた。

「すまないが、その子も怪我人かい？　もしそうならこちらで診よう」

「いや、怪我人ではないのだが、この少年の母親を捜している」

「そうか……、なら診療所を見てくれ。もしかすればいるかもしれない」

男がそう提案してきた。

もちろんそうさせて貰うつもりだが、少し確かめることがある。

「そのつもりだ。しかし待て、君たちはイシュヴァール人ではないな？」

「……ああ、私とサラはアメストリス人だ」

やはりイシュヴァール人ではなく、敵方のアメストリス人だったか。サラと呼ばれたのはどうやらこの男の妻らしい女の名前らしい。

「……ならば何故この街にいる。今、イシュヴァールとアメストリスは争っているハズだろう？」

そう、対立しているのなら敵の方の人間を治療するなどしないだろう。

それにこの危険な地区に来てメリットがあるハズがない。その理由を確認しなければと、警戒していたのだが……

「——人を助けるのに、理由なんているのかい？」

——そんな答えが返ってきたら、警戒を解かないわけにはいきまない。

当たり前のようにその様な事を言える人物などなかないない。以前の私みたいに強迫観念に突き動かされていた答えではなく、心からそう言ったようだ。

もちろん今の私も心からそう思えるが、私は素直にこの人達に敬意を抱き、同時に申し訳なくなった。

「……すまない、貴方たちを見くびっていたようだ」

「ハハッ、構わないさ。それに君もその瞳からするとイシュヴァールの民ではないのだろう？」

「えっ、お兄さんイシュヴァール人じゃないの!？」

少年が驚いた様に声を出す。どうやら私をイシュヴァール人だと思っていたらしい。

それも当然か。私の肌の色はイシュヴァール人と同じように褐色だ。それに目の色も黒色で、よく見ない限り赤色と区別をつけるのは難しいだろう。

イシュヴァール人の街でそこまで見る人はそうそういない。

「——よく、分かりましたね。なかなか気付く人はいなかったんですが。それと、先ほどまでの口調のことは謝罪します」

人の特徴をよく見ている証拠だろう。私はそのことに少し感嘆した。そして今の肉体年齢ではこの人達は年上だろうと判断し、敬語で話すことにする。

「気にしなくてもいいよ。それに職業柄、人と接する事が多くてね。

人の目を見ることはその人となりを判断する重要な事だからね。そんなことより、その少年の母親を捜してあげよう……サラ！ 君も手伝ってくれるかい？」

「もちろんよ、あなた。さあボク、行きましょう？」

女性はそう言い、少年に手を伸ばす。

「……うん！！」

少年は女性にそう言われて少し戸惑ったようだが、差し伸べられた手を取り笑った。

そうだった。

この人達の警戒に心をとられていた為、本当の目的を忘れてしまっていた。

今すべき事はこの少年の母親を捜すことだ。私はそのことを再度確認し、男性に答えを返す。

「ええ、ではお願いします。それと、あなたの名前を伺ってもよいでしょうか？」

「ああ、私はユーリ・ロックベル。そして妻の名前はサラ・ロックベルだ。君の名前は？」

……名前か。

悩む所だが、今の私の名前ならコレが一番似合っているだろう。

「私の名前は衛宮士郎……シロウが名でエミヤが姓です。」

まだ私が未熟だった頃の名前。

そして私が唯一敗走した男の名前。

なによりまだ私が正義の味方を目指していた頃の名前。

私はこの名前に含まれるいろいろな意味を噛みしめながら、自分の名前に自信を持って、そう答えた……

第二話 新たな決意（後書き）

読んでくれていた人には本当に期待はずれだったことについて謝罪します。

それでも良いという方はアドバイスとか感想ください。

第三話 得た者と得ていない者（前書き）

またやってしまった。

自分の文章力に合っていないPVの多さに恐縮しています。

そして、いつも見てくれている人達に感謝をしています。

では今回も注意して読んでください。

第三話 得た者と得ていない者

「それにしても良かったね、見つかった」

「はい、本当に……」

あの後、私とユーリさん、サラさんで少年の母親を捜し始めた。
この診療所には重傷な者から軽傷な者まで、この内乱で傷を負った
人達が多く居た。

その中には少年の母親も居て、どうやら少年とはぐれた後しようが
なくこの街に逃れてきたようだ。

困ったことに、事情を話すと泣きながら私にお礼を言ってきたが。

「それにしても《正義の味方のお兄ちゃん》かつ……ハハッ」

ユーリさんが楽しそうにそう言って笑う。

どうやら先程のお礼をされた時に少年が言った私の呼び方がそれほど
面白かったらしい。

「はははっ……はあ」

私はその言葉を聞いていると渴いた笑い声とため息が出てしまう。
……私としては別にふざけた訳ではなかったのだが。

「ふふっ、ごめんなさいね。私達も馬鹿にしてる訳ではないのよ。」

カッコイイじゃない、正義の味方」

サラさんがそう私に言ってくる。

そう言う二人の手は止まらない。

先程からずっと患者の手当てをしているのだ。

銃で撃たれた者・強い打撃を受けた者・火傷を負った者など様々な患者を次々と治療していく。

その動作は鮮麗されていて医者としての高い技量が察せられる。

「分かっていますよ。貴方達がそんな人間ではないなんてこと」

私はサラさんにこう返す。

こんなに一生懸命に人を助けることできる二人だ、人を馬鹿にするような人間な訳がないだろう。

……だからこそ私は少し気恥ずかしく感じたのだが。

「でも本当にすごいと思うわよ、ねえあなた」

「ああ。なんたって、エミヤ君はあの子にとって本当の正義の味方になったんだからな」

二人が立て続けにそういつてくる。

だが私はその言葉を素直に受け取ることはいできない。

「……いえ、私のそれは偽善ですよ。ただの自分勝手な自己満足です」

私は自分の理想を貫くと決めたとはいえ、これは正真正銘の偽善だ。自分が一切関わっていない争いに介入し、死にかけている者がいればそれを容認できず、勝手に救う。

向こう側にも何か理由があったのかもしれないのに負けている方を一方的に救うなんてその場限りの善でしかない。

まあ、だからといってもう後悔することなどしないが。

「そんなに言うことはない。それに、君のがそうなら私達のだって偽善だよ」

「——そんなわけがない！ 貴方たちのしている事は正しいことだ！」

私はユーリさんの言葉に反論する。

柄にもなく熱くなってしまったという考えを思考の端に置きながらも「その事は認めてはいけない」という気持ちを声に出す。

なぜならこの人達は医者の本分である、人を治すという事を貫いている。

そんな人達と私のソレを一緒にすることなど絶対にできない。

「いいえ、私たちのも同じよ。なんと言ってもこの患者さんの証言でもあるのよ」

「ああ。私たちのしていることは、自分の国の人間が傷つけた人達を自分たちで治そうという事だしな」

しかし二人は笑いながらそう言う。
その声には迷いがない。

……そんな二人に私は問いたくなつた。

この人達が偽善と理解した上で人を助ける理由を。

「……なぜ貴方たちは罵られてまで、ここで人を治し続けるのですか？」

その私の言葉に二人はきよとした表情で私を見た後、軽く笑つた。

「それは君も同じだろう。まあ、あえて言うなら私は『やらない善よりやる偽善』が正しいと思つているからだな。それにアメストリス人もイシュヴァール人も関係ない。ただ一人の医者としてこの状況を見過ごせる訳がない」

「それに私たちアメストリス人がいるとわかれば国軍もここを標的にしないでしょう」

二人のいつていることは世間一般的には正しいのだろう。

特に『やらない善よりやる偽善』という部分では私自身共感できる部分もある。だが……

「あまいですね。軍というものは大の為には小を切ることが前提として成り立っている。このまま貴方たちがここに居続け、治療を続けたとしても軍の攻撃は終わらない」

組織というモノがどれだけ融通が利かないものかは私がよく知っている。

ましてや軍という国の重要機関がよけいな犠牲を払ってまでたった二人の人間の為に動くはずがない。

「そうかもしれない。しかし、私たちはなにより……」

そう言いながらユーリさんは私の後ろを指さす。

その言い回しを怪訝に思いながらも、私もまた、その指につられるように後ろを振り向く。

「先生！ 包帯洗えたよ！」

「まだ僕たちにはすることない？」

——そこには少年と少女が居た。

その光景を目のあたりにして私は目を見開いた。

もちろん、それだけなら当たり前前の光景だろう。

何も、この歳の子どもが医術の手伝いをしていることに驚いた訳ではない。

私が驚いた理由は彼らがイシュヴァールの民であったことだ。

私の様子を見ていた二人は、まるで私の心を読んでいるかのように話します。

「ふふっ、どう？ この子達を見ていると思わない？」

「『私達はまだやれる。まだわかりあえる！』ってね」

わかりあっていくこと……実際、その道に行くことは難しい。

確かに互いに助け合う道を選ぶ人間はいるだろう。

だが全員がその道を選ぶ可能性は限りなく0に等しい。

この世は綺麗事だけで回っているのではないのだから。

——しかしこの子達の姿を見ると、まだその道が続いているように思える。

まだ行ける、まだその道を歩いていける……と。

「ふう……貴方達は早死にしたいと思いますよ？」

その生き方をする人間は普通に暮らす者より確実に苦勞するだろう。

……なにより私自身が体験者だ。

まあ、生前の私と二人を同じにすることは二人に失礼だと思うが。

「ははっ、まだまだ私達は死ねないよ。何より娘を田舎に置いてきているしな」

「それに絶対に帰るって約束しちゃったしね」

私のため息混じりの忠告にも、二人は笑って言葉を返す。

先程の少年と少女を相手にしながら話している所から、自分の子どもと彼らを重ねて見ているのかもしれない。

親と子の仲がいいことは素晴らしいことだ、二人の話を聞きながら私はしみじみと思っていた。

……しかし、いい雰囲気だったにも関わらず、ユーリさんは思い立った様に話し始めた。

「そうだ！ 君もこの内乱が終わったら娘に会ってくれ。かしこくて良い子だぞ」。うん、エミヤ君なら娘にちょうどいいかもしれないしな！」

「だめよ、あなた。ウィンリイにはエド君とアル君がいるんだから」

「そうか……いやしかし、三人でウィンリイを取り合うという関係もいいのではないか？」

「なるほど……恋敵として三人が切磋琢磨しあうのね！ うん、いいかもしれない！」

……なぜかおかしな方向へ話がずれていつているような気がする。しかもこの人達の年齢を考えると二人の娘さんは10歳にもならないのでないか？

その場合で私とどうにかしようとするなど……正気か？
というか、私に年下趣味などない！ ないと信じたい……

そうやってなごやかな空気になってきたにも関わらず、誰かがこの場に走って来ている騒がしい音が聞こえてきた。

「ツウツ、ハア、ハツ——先生!!」

「!?!? ……何かあつたんですか?」

騒がしい音の正体はイシュヴァール人の青年であつた。

だがその青年の様子は息をきらし、表情も険しく何かを伝えようと必死である。

何か嫌な予感がするな……

「はっはあっ——アメストリス軍が、国家錬金術師を前線に出してきやがった!!」

国家錬金術師という言葉が出てきた。

錬金術師とはそのままの意味で錬金術を扱う者という事だろうが、国家とは国に所属しているということだろうと私は推測する。

「……軍は本気でイシュヴァールを殲滅するつもりなのか?」

ユーリさんやサラさん達の表情はかなり険しい。

さらにどこことなく診療所の外の様子も先程より騒がしくなってきた。

「ユーリさん、国家錬金術師とはそれほど厄介な物なのですか?」

私はこの世界に来たばかりなのでまだその辺りの情報に疎い。

憶測だけで決めつけるのは極めて愚かな行為だ。

よって正確な情報を得る必要がある。

「詳しくは知らないが、国家錬金術師は「人間兵器」とまで呼ばれるほどの錬金術の使い手らしい。彼らはその能力を軍に売ると引き替えに莫大な金と権利を得るそうだ。……確実にこれまで以上の死人がでるだろう」

やはり、錬金術というものはこの世界では上位の力なのか……
確かに優れた術師ならば様々な現象を起こし、破壊行為を行えるだろう。

そして、恐らくユーリさんの言う通り多くの死者がでる。

そのようなことを私は見過ごせない。

「キミ、この近くで被害を受けている地域を教えてくれないか？」

「あ、ああ、この街の東に行ったところのドート地区が国軍に攻められている」

「そうか……、ユーリさんサラさん、興味深い話をありがとございました」

「……行くのかい？」

「——はい」

正直な所、私が何をしてもこの戦争は終わらないだろう。
それに今私が戦場にいったところで、できることなどないのかもしれない。

——だが、こうしている間にも死に絶えていく人達がいる。

ならば私がここで何もしない訳にはいかない。

急がなくては……、これ以上救えたハズの人達を死なせないために。

「……わかった、だがこれだけは約束してくれ。決して死なないことを」

「この内乱が終わったらリゼンブルに来てちょうだい。娘と待つてるわ」

「ええ、必ず」

そう答えて私は走り出す。

その足取りは焦っているように自然と速くなる。

しかし、私が少し移動したところで背後から声が掛かった。

「頑張れよ！！ 『正義の味方！！』」

ユーリさんは私に向けて豪快にサムズアップし、サラさんはそんなユーリさんの行動に苦笑しながらも手をこちらにむけて振ってくる。だがそんな二人の両人からも共通して、私を信じてくれている強い気持ちが伝わってきた。

「クッ、私の理想に対しての応援など、いつ振りだろうか？ ……ユーリさん、サラさん、ありがとう。私は貴方たちに会えた事を誇りに思う」

私は二人の力強い声援に口端をつり上げながら、二人に対して再び

感謝の言葉を呟いた。

さあ、こうして応援してくれている者達がいるのだ。
せいぜい期待に応えましょう。

私は自分の心が熱くなっているが自然と焦りはなくなっている事に
気付きながら、再び走り出した……

「ドート地区」

ここでもまたアメストリス軍とイシュヴァールの民との攻防が行われていた。

そして、この地区での両サイドの争いは先程まで互角だった。

そう、互角だったのだ。

元々イシュヴァールとアメストリスにおいての兵数や武器の性能ではアメストリスの方が圧倒的に上回っていた。

それにも関わらず両サイドが互角の争いを続けられていたのは、ひとえにイシュヴァールの武僧の能力によるものであるだろう。

イシュヴァールの武僧はこの険しい砂漠で生きている上でさらに厳しい修練を積んでいる。

分かり易く言うと、イシュヴァールの武僧一人でアメストリスの一般兵十人分の働きをするぐらいだ。

そんな精鋭達が戦場に出ているのだ、両サイドの攻防が互角になるのはむしろ必然だった。

しかし、現状その戦況はアメストリス軍に傾き始めていた。その原因を作ったのは——たった一人の男によるものだった。

- - バチッ

なにしろその男が指を鳴らすだけで大砲の様な威力の火柱が生まれるのだ。

その原理は燃焼の三要素である燃焼物・酸素・点火源を錬金術によって生成することで炎を起こすというもので、この場合では対象を燃焼物とし、錬金術で空気中の酸素濃度を調節、そこに発火布で作られた手袋を使い点火して炎を起こしている。

そのような錬金術にただの人間が抗うすべなどなかったのだ。

男の名はロイ・マスタング。『焰』の二つ名を持つ国家錬金術師だ。

男はまた、錬金術を発動させる……

「すつげえ、少佐！ 一発で敵をこんなに倒すなんて……！」

「……ああ」

男は部下の賞賛の言葉にも適当に返事をする。返事をする間にも男の手は止まらない。

「……」

- - バチッ

男は自分の錬金術を淡々と発動させながら思っていた。

……なぜ私はこんな事をしている？　なぜ部下は私のこんな行為を見て喜んでいるのだ？

いくら自分達の方に有利な事をしているからと言って、自分のしている事は唯の人殺しでしかない。
どこに喜ぶ要素があるというのだ？

「……………」

- - バチッ

また、人を殺した。

戦場ここでの生活はこの事ばかりだ。

大砲をぶち込み、追い込んで包囲して、焼き尽くし、残りはシラミつぶしに銃殺、その繰り返し。

こんな行為を続ける軍に嫌気がさすが、もうそれに慣れてしまった自分にも嫌気がさす。

この戦いで、自分の目つきは変わってしまった。

「人殺しの目」になってしまったのだ。

これはもう一生治らないだろう。自分の犯した罪は決して消えない。

「……………」

- - バチッ

……おかしい、何処で間違ったというのだ？

士官学校では仲間と共に目をキラキラと輝かせ、この国の未来について皆で語り合った。

そう、「美しい未来」についてだ。

そして、その「美しい未来」には——こんな光景は含まれていなかった。

自分が錬金術を師匠せんせいから学んだのだって、国民を守る為だ。自分が力を欲したのだって、国民を守る為だ。

——決してっ！ その国民を殺す為のものではなかったはずだ……

- - バチッ

「少佐！！ イシュヴァールの戦闘員、全て制圧完了しました！！」

「……そう、か」

部下がこの地区での戦闘の終了の報告を伝えてくる。

私はその報告に目を閉じながら返事を返す。

「……」

この地区の制圧を終えたことは嬉しくとも何ともなかった。たとえ、この地区の戦闘が終わってもまた次の地区で人を殺さなくてはいけないからだ。

「少佐！ 後は女、子供だけなのです。で自分達に任せてください！」

部下が自分にそう伝えてくる。

自分が出る必要があるのは戦闘員が居るところだけで充分。

後の女、子供達に抵抗する力などあるハズがないからだ。しかし……

「いや、私が行く。お前達は下がっている」

「しっ、しかし……」

「下がれと言っている！」

「！？ 了解！！」

部下は敬礼し、撤収を始めた。

……私が自らその役を買って出たのは自分の罪を忘れない為だ。
戦闘員は殺すのに女、子供は殺さない。などといった誤魔化しは許されない。

- - ザッ、ザッ、ザッ

私は地面の砂を踏み歩きながら、ゆっくり目を開けた。

そこには十数人の女、子供が居り、互いに泣き、震えながら抱き合

っていた。

「……何か、言い残すことはないか？」

私はその人達にそんな事を問う。

「……」

その人達は私の問いに答えず、ただ目で私を睨むのみだった。

……私がこんなことを言ったのは罵って欲しかったからかもしれない。

そうしなければ、自分の行った事に押しつぶされそうだったから……

「そう、か……」

問いへの返事はなかったが、この人達の目は口に代わってその思いを伝えていた。

……私は君たちを決して忘れない。

君たちが恨んでも私はそれを否定しない。

そう心の中で呟きながら、指を鳴らして錬金術を発動させようとした……

「……、っ!？」

しかし、その行為を完了することは叶わなかった。

何かが私の目の前を通り過ぎていったからだ。

「あれは……矢か？」

銃が主流となったこの時勢に旧時代の武器が飛んできた事を怪訝に思いつつも、私はその矢の発射方向を確認する。

「悪いが、その行為は私が許さない」

そこには男が居た。

180を優に超える長身と褐色の肌に白い髪、えらく特徴的な容姿をしている男はそんなことを言った。

「——お前は、何者だ？」

この肌の色ならイシュヴァールの民だと考えるハズなのに、私はこの男に得体の知れない威圧感を感じ、そう言ってしまった。

すると男は私と女、子供達の間に入りながら口端をつり上げた。

「クツ、何者……か。そうだな、あえて名乗るのならこう答えよう」

「……」

「『正義の味方』とな」

私はこの言葉を聞いて、イシュヴァールの戦場で正義を語る男に苛

立ち、同時に、正義がなんなのか分からない自分にも苛立ちを強く
した……

イシュヴァールの戦いは、まだ終わらない……

第三話 得た者と得ていない者（後書き）

本来はもっと文章量が多かったハズなんですけど1回書き終わった後に消してしまいました。

すいません。だんだん増やしていきたいなあとは思っています。

いつも感想してくれる人達、ありがとうございます。

これから（続くのか？）よろしくお願いします。

第四話 理想への覚悟（前書き）

更新遅くなってすみません。

この話は、前に投稿した四話をかなり修正したものです。
（主に後半部分を）

だから、前に四話を見た人も、どうか見て欲しいと思います。
……修正前とかなり展開が変わるので。

ではどうぞ。

第四話 理想への覚悟

『正義の味方』

そうやって私はこの男に名乗りをあげた。

この名乗りには私自身の想いととも、背後の居る人々を安心させるという意味合いも含まれている。

あまり軽々しく正義など語ることは許されないが、この人達に少しでも希望を与えられるのなら安い物だろう。

私はそんなことを考えながらも、今すべきことはこの人々を避難させることだと判断する。

「……」

だがそうなる問題はこの男だ。

男は私が現れてからずっと、油断無く私を見据えている。

戦場に身を置いている者なら当然のこの行為だが、この男の立ち振る舞いからしてなかなかの力を持っていると思われる。

果たしてこの男を抑えながらこの人達を逃がすことができるだろうか？

……いや、考えている暇など無いな。

私の後ろに守るべき人々がいる、それが意味することなど一つしかない。

私は意味のない思考を廃棄し、背後の人々へと話しかける。

むろん、その間にも男から視線を外すなどという愚行はしない。

「立てるか？」

「はっ、はい……」

「ならば立て。そしてこの街から西に行ったところにある街へと歩け。そちらの方角にはもう兵士は居なかった。それに、その街には医者も居る。その子供達の怪我也見てもらうことができるだろう」

この人達の中には怪我をしている子供が幾人かいた。

まだ出会って間もないが、ユーリさんとサラさん、あの二人なら信頼できると確信している。

するべきことを増やしてしまう事になるが、あの二人ならきっと進んで治療してくれるだろう。

「でっでも、あなたは……？」

一人の女性が私に尋ねてくる。

どうやら、私の身を案じてくれているらしい。

「いや、心配ない。それに私にはまだすることがある」

私がここで弱音を見せるなど、論外だ。

私は返事を返し、男への視線を強くする。

この男と私の視線が強く交錯し、周りの空気も少し重くなったように感じられる。

さて、これからどうするべきか？

そう考え、この男へ思考を集中させようとしたとき、隣から声が聞こえてきた。

「あの……ありがとうございます」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

私はその声が聞こえてきた方を横目で見た。

するとそこには大人達が私に礼をしながら、それぞれの子供達の頭を押さえているという光景が広がっていた。

「……あちらの街に着いたらもう避難するように伝えてくれ。恐らく、すぐに国軍の攻撃があちらにも伸びるだろう。それと……気を付けて行け」

「はっ、はい。貴方もお気をつけて」

「気を付けてね……！」

「……ああ」

先程の街での少年の事もそうだが、感謝をされることには慣れない……
そう思いながらも、私はその人達に返事をかえし、人々を見送った。

だが、こうして私が守るべき人達を送り出したところで一つ問題点

ができた。

いや、これは問題点というより疑問点だ。

「……さて、君は何故手を出さなかったのかね？」

そう、私が人々を相手している間に男は何もしなかった。強いて言うなら私の行動を逐一目で追っていたぐらいか。

むろん、その間にこの男が私の行動を待つ必要はなかった。むしろあの時に攻撃を仕掛けてきた方が男にとっては有利だっただろうに。

「……あの人達の相手をしている間も君は私への警戒を怠ってはいなかった。そして、私はあの者達より君への警戒を優先すべきだと判断したまでだ……」

——なんともまあ、お人好なことだ。

この男は意図的にあの人々を逃がしたらしい。

「そうか……ならば、このまま私も見逃してくれると嬉しいのだがね？」

一応、私を見逃す気がないかを尋ねてみたが……

「……逃がすわけ無いだろう。ここは戦場だ。その覚悟があったからこそ、君も此処に出てきたのだらう？」

やはり、希望的観測だったようだ。

当たり前か。この男の言うとおり、ここで見逃すようなら男もこんな所にはいないだろう。

「ふう……仕方がない、か。すまないが、無力化させてもらおう」

男のその答えに、私の口からは溜息と共に挑発ともとれる言葉が出る。

そして私のこの呟きに男が身構えるのも見て取れた。

さて、口ではこう言ったものの、相手の力もなかなかのものだと推測する。

どうなるかは分からない。

——だが、この身は幾度の戦場を越えて敗北は一度のみ。もはや敗北などという道はない。

私は自分の思考を研ぎ澄まさせていきながら、相手の分析を始めた。

「……」

私はまず相手の戦闘技法を分析することから始める。

これは相手の戦い方を知る事で、取るべき選択肢をおおよそ掴むためだ。

ただ闇雲に行動を開始する者は、ただ未熟でしかない。

男の両手に視線を移す。

そこには錬成陣と思わしき印が入った手袋がはめてあった。このことから、恐らく相手は錬金術師だと判断できるだろう。

錬金術師との戦闘は初めてだが、不測な事態など私は幾度も乗り越えてきた。

今回も自分の戦闘技術を信じ、実行するだけだ…

私がそこまで考えを終えたとき、男が不意に自らの手をこちらに向け――指を鳴らした。

「……？　――っな！？」

男の指の周りで火花が舞ったかと思うと、チツチツチツという音と共に、電流のような物が空気中を通して私の方へ向かってくる。

――これは……マズい！！

私は自分の直感に身を任せ、反射的に後ろに跳んだ。

――チツツ……ドオオオオン！！

私が跳んですぐに、先程まで私が居た場所がすさまじい音を引き連れて爆発した。

「ちつ、やはり先程のものは錬成反応か！」

錬金術を発動させようとする時には、まるでその証の様にまばゆい光が発現する。

錬金術を知って間もない為に幾ばくか反応が遅れたが、それを再確認出来たのはよしとしよう。

だが、この男との戦闘に思考を戻すと厄介な物でしかない。

なんといっても男は1アクションでこれほどの規模の現象を起こせるのだ。

なるほど、「人間兵器」と呼ばれるだけのものはある。

「くっ、留まる暇もないな」

私が避けたのを確認したのだろう、男は私の着地地点に次々と火柱を立てていく。

それに合わせて私も跳び、走り、身を障害物に隠すなどして回避するが男は私の接近を許しはしない。

「『兵は拙速を責ぶ』と言うだろう、先手必勝だ。悪く思うな……」

私に語りかけているのか、独り言なのか、どちらかは定かではないが男が呟く。

「ふんっ、孫子か。この世界にもあるのかは疑問でしかないが……」

私はその言葉に対し男の攻撃を回避しながら、吐き捨てるように呟く。

男が言った言葉は、私の世界にあった古代中国の兵法書、「孫子」の内容にあつたはず……

世界が言うには平行世界ではなく、ましてや異世界などという存在であるらしいのだが、それにも関わらずそんな所まで類似しているのだろうか？

……まあいい、そんな事は些細なことではない。

今すべきことは、この男の戦力を無力化することだ。

「接近できないのであれば、しなければいい」

生前、私は何をしてても二流だった。

剣も、槍も、格闘も、魔術も、どれだけしても一流にはなれなかつ

た。

そんな私がどうしたか——簡単だ。それら全てを二流に極めればいい。

また、あらゆる場面にも対応出来るようにそれらの使い道を戦場で学んだ。

そして今、男が私の接近を許さないと言うなら、その状況で最適な闘いを行うのみ……

- - パンツ

男の攻撃を回避しながら、私は自分の両手を重ね合わせ

- - バチッ

——周りの残骸に両手をついた。

「なっ——錬金術師だと!？」

男が私のこの行為を見て驚きの声をあげる。

今私が行ったのは錬金術の行使。周りの残骸の物質を分解し、投擲用の短剣に再構築するというもの。

なぜ私がここで投影を行わず錬金術を使ったのかというと、手の内を見せたくなかったというのもあるが、第一に魔力の消費の節約というのが理由に挙げられる。

先程、この男が人々を追いついていたときに私は咄嗟に弓と矢を投影し、男に放った。

その時に再確認したが、やはりこの世界での魔術行使はかなりの魔

力を消費する。

よって、私はまだまだ戦争が続く現状で、無駄な魔力を消費するのは愚策だと判断した。

「――」

体を捻り腰を低く構え、自身を一機の銃身へと変格させる。
そして相手、すなわち男を、手元にある短剣の標的に定め――投擲する。

「ふんっ！」

これも、生前に私が体得した技術の一つである。

接近が出来ない今、男の隙を作るにはもってこいの技術だ。

そして私の投擲した短剣は、かなりの威力を伴って男に飛んで行く。

「――くっ、なめるな！」

――バチッ

男は指を鳴らす。

その行為により再びまばゆい光が発現する――錬金術か。

そして男の錬金術によって生じた炎により、私の投擲した短剣は一瞬にして消し炭にされる。

どうやら、細かい錬金術の発動も可能らしい。

しかし迎撃されるという結果は予想済みだった為、投合した後すぐに再び錬金し短剣の投擲を続ける。

動きは鈍っていないか？ 足下を地面に奪われていないか？ 私か

ら注意を逸らしはしないか？

そして相手の隙を決して逃さない、そう思いながら男の振る舞い全てを把握するよう観察する。

だからであろつ、私がそのことに気づけたのは。

「――」

――目があつた。

男の目、その目は私を殺す気で攻撃しているのに対し……後悔の色を灯していた。

ああ、あの目、あの目を私は知っている。

一体何処で見たのだろうか？

私がこれまでにこの男に会ったことがあるのだと言つのなら話は別だろう。

しかし、私は元々この世界の者ではない。

そうにも関わらず、この男の目を知っているのは……

「――ちっ」

不意に思い出した。

そつ、か。あの目は……

そつだ、私はあの目を一番知っている。

気に入らない……気に入らない、気に入らない――

「貴様はなぜ！ そんな目をして此処にいる！？」

気付くと私は叫んでいた。

以前の私と同じ目、”自分の理想に打ち負けている目”をしている男に。

「貴様はなぜ！ そんな目をして此処にいる！？」

目の前の男が叫ぶ。その表情は何か…気に入らないものを見たような顔をしている。

あの男が錬成陣なしで錬金術を使ったのには驚いた。

だが依然として男との距離は開いたまま、私の優位には変わりはないかった。

そんな時、男が私に向かってこう叫んだのだ。

そして私は、その言葉が——どうしようもなく癪にさわった。

「お前に何が分かる！？」

- - バチッ

自らの、焰の錬金術を男に向けて発動しながら叫び返す。

男の言葉。

私の胸の葛藤をいざ知らず発した言葉を、私はどうしても許すことができなかった…

「くつ、……分からないな。貴様は人を殺しているのにも関わらず、それを後悔している。そんな者が戦場（いくさば）に居る理由などな」

男は半壊した家の上に飛び上がり、私の攻撃を回避しながら投擲を放ってくる。

「……確かに、私は後悔しているかもしれない。ああ、そうだともし！ 本当はイシュヴァールの人々も殺したくはない——だが！ 私が戦場に出なければ、多くの味方の兵士が死ぬ——」

私は叫ぶのと同時に指を鳴らし、男の放った短剣を錬金術で打ち落とす。

軍がこの戦争を続ける以上、味方の兵を生かすことができるのは同じ軍の人間しかない。

そして味方を守る為には、殺される前に殺すしかない。だから私は、戦場（いくさば）に居続けるしかないのだ……

「——貴様は、その犠牲を容認したというのか？」

私と目の前の男、錬金術による両者の攻防で、この場は爆音に包まれていた。

しかしその中で、男の静かなる問いは…妙に私の耳に響いた。

「……」

私と男を睨み合う。今の立ち位置は、男が私を見下ろすような配置になっている。

そして、気付くと両者の攻防も止んでいた。

その中で、私の思考は深い暗闇に沈んでいく…

『錬金術のあり方・軍のあり方・今、ここで行われていること』

それらが頭に浮かんでは消え、浮かんでは消え、延々と思考がループする。

私は、間違っているというのか？

いや、間違っただけじゃない！ 私が敵を殺さなければ、味方の兵士が死ぬのだ！ 間違っているはずが……

『守るべき民、その笑う表情、そして殺した者達、その絶望した表情』

——— ないと言い切ろうとした時に、その全てが私の思考を横切った

そうだ。私が殺していった人々の顔は、どのような顔だったか。

私が守りたいと思った人々の顔は、どのような顔だったか。

私の”理想”はどのようなものだったか……

【美しい未来】

私が描いた理想は皆が守り、助け合い、そして何より、その未来では全ての人々が笑顔だった。

しかしその理想はあまりにも遠い……
そして、私は無力だ。この広大な世界の中では、私の存在など有象無象の一でしかない。

ええいくそつ、こんなちっぽけな自分に嫌気がさす！

理想はあるが、その理想には手をのばせない。
そんな自分に自己嫌悪していると、男に動きが見えた。

「喋りすぎたようだな……もういい。貴様は今この戦場から消えろ」

男はどこか落胆したようにそう呟きながら、半壊した家の上から飛び降り、またもや短剣を投擲してきた。

「くつ、血迷ったか！」

男と私の位置関係で男が飛び降りると、必然的に男は空中に身を躍らすことになる。

この場合では逃げ場が無くなるだけでなく、男が今まで錬金術で構築していた短剣の原料である残骸も周りになくなる。
これは錬金術師として致命的な行為だ。

- - バチッ！

案の定、私が錬金術で短剣を迎撃すると、男は無手になり錬金術を発動するそぶりもない。

これで終わりだ！

そう思い指を鳴らそうとした時……

「なっ！？」

——男の手から、まるで元からそこに有ったかのように短剣が浮かび上がってきた。

「ふっ！」

男がそれを投擲してくる。

だが、私は想定外の事態に反応が遅れてしまった。

「——っ！」

このタイミングでは錬金術の発動は不可能、そう判断を下し回避することにする。

しかし男の放った短剣の速さはかなりのもので、無様に転がって避けるものとなってしまった。

「チイツ、くそっ！！」

このとき自分の服に砂埃が付着し汚れていくが私にはそんなことに気を割く余裕は微塵もなく、自らの失態を悔やむ気持ちでいっぱいだった。

転がる自分の身体を無理矢理に止め、この行動の原因となった男の方へ振り向く。

「——チェック、メイトだ」

くっ、遅かった、か……

戦闘中に隙を見せてしまった自分に対し毒づきながらも、私は自分の喉元に突きつけられている刃物を見た後、自分の気持ちを振り切るように、自分の足下の地面を睨み付けた。

——それでも私は……！

その視線に、自分の想いを乗せるように……

「——チェック、メイトだ」

私は宣告する、この闘いの終わりを。

そして男の喉元に伸ばした手には、一振りの剣が携えられている。この結果を見ると、やはり「投影」を使ったのは正解だったようだ。

錬金術の場合、無から有は生み出せないという原則がある。

そして、今回はその先入観を使わせてもらった。

私の魔術、つまり投影などは、おおざっぱに言えば魔力を消費する

だけで行使することが可能だ。

人は自分の理解できないものがあつたとき、何らかの隙が必ず出来る。

そしてその隙を突くのは容易なことだつた。

……まあ、この男の精神状態もこの結果の要因だつたのかもしれないがな。

「悪いが、ここで貴様はリタイアしろ」

私は男に有無を言わさないよう、高圧的に喋りかけた。

人を殺すことを後悔するような奴が、こんな所に居ても悪いことにしかない。

殺される側は勿論、殺す側もな……。これは、私自身が体験したことで。

「……」

男は私の言葉を聞いても、ただ下を向いている。

だがその中で、男が自分の拳を強く握っているのだけは、私にもわかつた。

そんな仕草や今までの行動で、この男が悪人ではないことは私にも分かる。

先程は私も激昂してしまったが、これでいいのかもしれない……

この男はただ、自らの力を現実的に見ていただけなのだから。

私はそうやって自分を納得させながら、男の意識をかり取るべく動こうとする。

気絶させた後に手足を少々折れば、この闘いからは退くことになるだろう、そう考えて。

- -ゴオオオオ-

だが私が動作を起こそうとしたとき、そんな音が聞こえてきた。この音は……まさか!?

「——っ、狙撃か!」

やはり先程の音は銃弾が通ってくる風切り音か!?

その証拠に、私が男に伸ばしていた手をひいた瞬間、その位置を正確に通過している弾丸が確認できた。

「くっ」

着弾する前に後ろに跳びながらも、弾丸の発射方向へと目を向ける。少し遠いが、やはりというべきかそこには狙撃手が居た。

一人の女性が此方に向けて再び狙いを定めているところを確認できた。

私の避けるポイントを予測して狙撃している……ちっ、まだまだ若いだろうに。

そう、その女はまだ成人もしていない様にも見えるぐらい若い。そんな子が戦場にいる事に気が取られたからだろうか……

「くっ……なっ!？」

男の錬金術によって抉られた穴に足を取られてしまった。

戦場でこんなミスを犯すなど……

くっ、そんな所まで昔に戻らんでもいいだろうに！

自分の愚行に私は毒を吐きながらも、すぐに体勢を立て直そうとした。

しかし、やはりそのミスは致命的だったのだろう。

顔を上げると、男は既に私の前に立ち、その指をこちらに向けていた。

「……」

しかし男は何も行動を起こそうとはしない。

私の方へ指を向けてはいるが、私を攻撃する、または降伏を求めるなどという動きは一切感じられないのだ。

さらに、微妙に俯いている顔からは表情を窺うことは出来ない。

だがそんな男の様子を怪しむ一方で、私の頭は次取るべき行動を冷静に模索していた。

——男に攻撃される前にこちらから仕掛けるか？

いや、普通のやり方では駄目だろう。

この男の錬金術はたった1アクションで発動する事が出来る……私が仕掛ける前にやられるのがオチだ。

……仕方がない。

そんな気持ちと共に、腹をくくり自らの呪文を唱えることを決意す

る。

(――――投影開――)

「私は……」

だがここで、私の心の中の詠唱にかぶせるように、男は声を放った。しかしその声はかなり弱々しく、この距離でなければ到底私の耳に届きそうにない大きさだった。

追い込んでいる側の人間が、逆に追い込まれているような声で口にしたのだ。

私が中途半端に呪文の詠唱を止めてしまったのも仕方がないことだろう。

「この戦場から逃げることなどできない、決して……！」

男は言う。

その声は弱々しくも、どこか力強いという矛盾した印象を受ける。

だが、私はそんな不明確な強さなどには構わず、男に言う。

「……貴様のその発言が、先程語ったものを理由としているなら――即刻消えろ。人を殺す覚悟の無い者がここに居る資格など無い」

そう、そんな人間が戦場に居たとしても、良いことなどありはしない。

殺される側の人間も、殺す側もだ……

これは、私自身が自分の生涯をもって得た、一つの真理だ。

「――それでも私は！ 私の「美しい未来」という理想の為にも！！ここから逃げるわけにはいかない！」

男は叫ぶ。その言葉は悲痛な声に乗せて届く。
いや、この声は自らを叱咤しているのかもしれない。

「……美しい未来、だと？」

「ああ。皆が守り、助け合い、そして笑顔であるという未来だ」

「——は、よく、そんな事を言えたものだな？」

私は男の理想の内容を聞き、嗤った。

自覚する。

今、私の顔はひどくこの男の事を馬鹿にしたような表情だろう。

「貴様は自分が今、何をしているのか分かってしているのか？ そして貴様に殺された者達が、その言葉を聞いて納得するとも思うのか？ ……それらを分かって言っているのなら、たいした道化だな」

確かに、イシユヴァールの人々を殺してからその理想を目指しても、殺された人々は何も言わないだろう。

死人に口なし。死人は何も語らないのだから。

しかし、そんな考えを持つている男がそのような理想を持ったとしても……破綻するだけだ。

「道化だと言われても構わない、だが私はその理想を決して諦めはしない！」

「——たわけ、理想を語るだけなら誰でも出来るわ！ だから貴様は道化だと言うのだ！」

私の嘲笑は止まらない。

いや、その嘲りはもはや直接的に相手を否定する域にまで達している。

理想、理想、理想と、ただ繰り返す言うこの男の様は、タダをこねる子供のように苛つく。

しかし次からの言葉により、私は男への認識を変えることになる。

「——理想を語って何が悪い！」

そう叫ぶと同時に、男の俯き加減だった顔が上がり、その視線が私の目を貫いた。

その目は戦闘中に見た、どの目よりも強く、どこか確固たる意志を含んでいるように思えた。

そして、私がその目に一瞬射抜かれた間にも、男の叫びは続く。

「理想論、綺麗事……それがどうした！ 理想を語らなければ、人間の進化はそこで止まる！！ 私の言っている事が、青臭い理想論などと言うことは、とうに分かっている。しかし、それを成し遂げた時こそ、それは”可能な事”へと変わるのだ——そして私は、それを必ず成し遂げてみせる！」

——強い、ただひたすらに強い、この男の叫びは。

そしてその叫びに秘められた意志は、男が本気だということを私に知らしめるのに充分だった。

確かに、物事の始まりにはそれを見つけた人物が必ず居る。

そして、それらを成し遂げたのはいつだって、理想を持ち、それを追った者だった。

その条件に当てはめるのなら……なるほど、確かにこの男もそうだろう。

……だが私が否定した事への答えが、未だに男にはない。それを聞くまで私は、この男が理想を追うことを容認できない。

「ならば、ここで死にゆく人々はどうする？ 仕方ない、そう言うて割り切るのか？」

私が最も重要とする点。

それはこの戦場で死にゆく人々……

そしてその理想を追うことに際し、どうしてもついて来るであろう犠牲のことを。

「……この内乱はもはや止められない。私の力では……、そんな事は分かりきった事だった。そして私は多くの人々を殺し、既にこの手は血塗られている。そんな私が、殺した人達に恨まれることは当然のことだ。そう、否定できない……」

「……」

一人の力とはあまりにも小さい。

そんなことは分かっている。

それは生前に、最も思い知ったことだ。私はそんな言い訳を聞いたのではない！

その程度なのか！？

私の目を、一瞬だけでも射抜いた貴様の目は……、貴様の、想いは

「――ならばその責、全て背負って行ってやる」

……ああ、そうか。

この男の言葉で一つだけ、再認識させられたことがある。

「勿論、私の決意とその人達の死が釣り合うなどとは思っていない。しかし、だからこそ！　このような責を背負うのは、私たちの世代だけで充分だ。この血塗られた手を、次の世代に繋げない為に！　それらを背負う……」

いや、忘れていた訳ではない。

……忘れるはずがない。それは、私が唯一敗北した男にも言えたことだった。

だからこそ、この男を見ているとその事を思い知る……

「これが、私の覚悟だ――！」

――理想を追う人間は強い

エミヤはそう認識し直すとともに薄く目を瞑り、口端を吊り上げた。しかし、これは先程のような嘲笑ではなく、どちらかというと楽しい印象を受ける。

もしかすると、彼は気付いてないのかも知れないが……その理論でいくと、彼にも同様なことが言える。

なにせ彼も、――理想を追う者なのだから。

理想を追い始めたばかりの二人。

彼らがその理想を貫けるかは分からない。

なにしろ、方や『正義の味方』、方や『美しい未来』、どちらの理想も限りなく遠い。

しかし、この二人なら大丈夫だろう。そう思える。

覚悟を決めた人間の目は、どんな目よりも強いのだから……

第四話 理想への覚悟（後書き）

待っていてくださった皆さん、本当にありがとうございました。

そして、別に待っていないなくても読んでくださった皆さん、本当にありがとうございます。

そして、これからも出来ればよろしくお願いします。

まだまだ未熟なので、どんどんアドバイスや感想をお願いします。

いつも感想を書いてくれる人は、とても励ましになりました！
これからもよろしくです。

第五話 鷹の眼（前書き）

少々遅くなりました。

さらに謝罪したいのは、こんなに時間をかけたのに、低い質の文章だということです。

展開もあんまり進んでないし、文章も……です。

感想で自分を卑下するなど言ってくれた人もいてくれましたが、卑下してしまいました。
すみません。

どうか注意してよんでください。

第五話 鷹の眼

ここに二人の男達が居る。

片方の赤い外套を纏った男は自らの口端を吊り上げ、もう一方の青の軍服を纏った男はその目に強い意志を掲げている。

理想を追う二人。さて、彼らは一体どのような道を行くのだろうか？この二人の様子を見てみると、その事が気になってやまない。

だが、この状況でいつまでもいる訳にはいかないだろう。

彼もそう思ったのか、白髪の子のエミヤは、軍服の子のロイに話しかける。

「いいだろう、貴様が口だけではないと言うのは認めよう。

だが自分の理想を、貴様は何処まで貫くことができるだろうな？」

どこまでもひねくれた男だ。

相手が理想を追う代価に相当する覚悟を見せたというのに、まだ試すような真似をするのだろうか？

素直に認めてやればいいものを……

「——言っただろう？ 私は必ず、『成し遂げて見せる』と」

だが、その問いに答えを返す男には迷いなど微塵もない。

その口には不敵に浮かぶ笑みも存在するぐらいだ。

まるで、自分はもはや立ち止まる気も、理想に負ける気もサラサラないと言っているかのようだ。

いや“ようだ”ではない、まさしくその通りの気概なのだろう。

「――ク」

彼も分かっていたのだろう、その答えが返ってくることはそれはなにより、彼の再び吊り上げた口端が物語っていた。

もしかすると、彼にとってはこの問答は、遠回しな激励なのかもしれない。

だとしたら、やっぱり彼は――ひねくれている。

「さて、君はこれからどうするんだ？　一応、私が勝利したとしておとなしく捕虜になるかい？」

目の前の男がそう提案してくる。
だがその言葉の羅列の中には、私にとって少し癪なものが入っていた。

「……いつ貴様が、勝者になったのかね？」

「ふむ、ここは戦場だ。私の方には味方からの不意な援護があったとはいえ、結果が全てだとおもうのだが……、君はどう思う？」

確かに、敵の不意を打たれたのは私のミスだ。そこは認めよう。
だが、私にはまだ手が残されていたのだが……。

……終わったことをとかく言っても仕方がない。

手の内を見せなかった、そう考えることにしよう。

「仮に貴様を勝者として認めてやったとしても、捕虜になどなる気はない」

「だろうな……」

男は私の返答を予期していたのだろう、すぐに言葉を漏らした。その返答は簡潔なもので、ひどく軽かった。

その言葉からは、私の返答について特に不満に思う様子が窺えない。

「……何故だ？ 貴様は何故、先程までのように行動しない？」

ふと気付いたとき、私は疑問に思った事を口に出していた。

先程から感じていたことだが……今のこの男の雰囲気を見る限り、先程までの私を攻撃しようとする、そんな刺々しい感じが見受けられない。

私から見ると別に悪い変化ではないのだが、こつもあつさりしていると逆に怪訝に思ってしまう。

「その事については……頭に上った血が下りてきたからな。冷静に考えることにしたのだよ。そうしたらすぐに理解できた。君は、イシュヴァールの民ではないのだろうか？」

「……根拠を聞いても構わんかね？」

「ああ、それなら簡単だ。君は私と闘っているとき、致命傷になるような攻撃はしてこなかった。」

君が投擲した短剣にしても、直接的に死に至る所は狙わなかっただろう？ だからだよ」

「……そのどこが理由になる？」

私がこの男への致命傷を避けていたのは、確かにそうだ。

別に殺さなくても、相手に傷を負わせて戦場から退かせれば、私の目的は達成できた。

私はこの男が殺したいほど憎い訳でもないし、なによりそんな手段は……なるべくとりたくない。

しかし、そんな私の思惑とこれは別の話だ。

男の言った理由から、私がイシュヴァールの民ではないなどと分析することはできないと思うのだが。

「……イシュヴァールの民なら、私を殺す気であるさ。私が殺してきた者達の復讐のために……」

男は静かに目を瞑る。

私にはその表情から、何かを思い出しているのか、懺悔しているのか、どのような類のものかは判断できない。

だが、その表情が良い方向のものでないのは判る。

私はその悟りきったようなこの表情が、気に入らなかった。

「貴様は、本当にそう思っているのか？」

……確かに、私はイシュヴァールの者ではない。しかし、貴様のその推測の仕方は果てしなく間違っている」

「……なに？」

男が疑問の声をあげる。閉じていた目もゆつくりと開いた。
この様子だと、本当に判っていなかったようだ。

……無理もないか。
私も少し前までは判らなかった。いや、判ろうとはしなかった。

「悲しみ、絶望、憎しみ……確かにそれらを抱いているだろう、イ
シュヴァールの人々は……」。

だが、それらが全て復讐に向くと貴様は言っのなら、それは勘
違いも甚だしい。いや、——彼らに向けた侮辱でしかない」

「——」

「復讐が復讐を生む、そんな負の連鎖を断ち切るように立ち上がった者達。そんな者達がいることを、貴様は知らなくてはならない……」

……」

私は見た。

肉親を殺された者達。

友を殺された者達。

自らが帰る家を失った者達。

それらの絶望を全て被った者達。

——だが、そんな状況に立たされてなおも、その者達が立ち上が
ろうとする姿を。

必死に治療をする敵国の医者達に心を打たれ、共に助け合おうとし
た者達の姿を。

故に私は、男の間違いを正さなくてはならない。

「……そう、だな。私が愚かだった」

私の言いたいことがしかと伝わったかどうか、そんな事はわからない。

所詮人間とは、自らが見たものしか本当の意味で理解することはできないのだ。

だがこの男が、私の言ったことを真剣に受け止めようと言うのならそれでいい。

さて、こいつが……いや私もか。

私たちのすべきことは、こんな事ではない。

「ならばきどるな、そんな辛気くさいことを言ったところで得なことなどありはしない。」

もしか、貴様の覚悟は口だけのものだったと言うのか？」

先程語った覚悟がただの空虚なものとしたならば、私は今からでもこいつの理想を砕くだろう。

覚悟を伴わない理想は破綻する。

ならば私は、その理想を砕くことを——躊躇しない。

「それは違う。……だがそうだな、今のままではただの一步すら前に進めない。このことは私の胸の内に留めるとして、君に少し話を聞くがいいかね？」

男は噛みしめるようにそう呟き、私の方を見てそう訊ねた。

そうだ、それでいいのだ。

過去を振り返るだけでは前には進めない。

何かを成し遂げたいのなら、まずは出来ることからするべきだ。

私は男がその考えにやっと到達したことに少しは満足し、その問い

に答えようとする

――前に、男の後方に目を向けた。

「……どうかしたのか？」

男も私の視線につられるように後ろを振り向くが、何も見つけられなかったであろう。

怪訝な気持ちを隠そうとはせず、自らが発した言葉に疑問の色を加えてきた。

まあ……そうなるだろうな、普通は見えない。

私は一人で納得しながら男の疑問に答えることにする。

「いやなに、貴様の質問に答えるのは厳かでもないのだが……さすがに、標的を定められたままなのは、勘弁してもらいたいのでな」

「何……？」

「私が先程、不意を打たれた狙撃手のことだ。」

「どこにいると言うのだ？ 私には瓦礫ぐらいしか見ることが出来ないのだが」

それはそうだ。

ここからその狙撃手の所までは、400メートル以上離れている。

普通の人間ではこの障害物、もとい瓦礫で埋め尽くされているこの場所で、あの狙撃手を視認するのは至難の業だろう。

「気にすることはない、それよりも行くぞ。確かに優秀なのは理解したが、スコープ越しに狙いを定められていることには、私も警戒を解くことができない」

私は返事を聞く前に歩き出す。

その背後からは、男が何か文句を言いながら着いてくる。

なに、男の問いには答えてやると言ったのだ。

最低限の礼儀として、この程度のことは許容してもらわなければな

よって私は振り向かない。

今私が見据えているのは、スコープ越しに目が合った狙撃手だけだ。まだ歳若い、狙撃手を……

「……」

スコープ越しに人間を二人ほど、視認する。

マスタング少佐と、白髪長身の男の二人だ。

少佐は言うまでもなく、もう片方の男にも私は見覚えがある。

おそらく少し前に、違う地区で少年を助けてみせたあの男だ。

先程、少佐が白髪の男に追い詰められているのを確認した時、私はすぐに少佐の援護に入った。

その成果によってか、少佐は隙をつき、男と少佐の形勢を逆転することに成功した。

けれども、そこから二人は何かを語り合っていたのか、場が膠着状

態になつてしまった。

けど私はその間にも、スコープから目を逸らすことはしなかった。戦場では一瞬の隙が命取りになる。

援護の役目を果たそうとしていた私は、その隙をカバーする役目があつたのだから当然だ。

「ふう……」

私はスコープから目をハズしながら、小さく息を吐き、目をゆつくりと瞑つた。

……これだけ長い間、標的を定めながらも人を撃たなかったのは久しぶりね。

私は、目を瞑つたことにより目の前が真つ暗な今、そんな事を考えた。

ダメだ、こんな愚痴みたいな事を考えては。

頭ではそう理解しているが、どうしてもこんな事を考えてしまう。

なにしろここで要求されるのは、如何に素早く、正確に敵を撃てるかというものだ。

そこに一切の慈悲はないし、また、守る為の銃ではなく殺す為に引き金を引かなくてはならない。

「『鷹の眼』、か……」

知らないうちに声が漏れていた。

思考に没頭しすぎていたのだろうか？ それともこの呼び名が嫌に

なってしまったのか……。

『鷹の眼』

これはこの戦いで、私につけられた一つの呼び名。

戦場で正確に、ただ淡々と敵を撃っていく姿からつけられたらしい。勝手につけられた呼び名だけど、自分によく似合っていると思う。

……私の目は、濁っているから。

今は鏡で自分の顔を見たくない。

たぶん今、私はひどい顔をしていると思うから。

いや、“今”じゃない、この戦場に来て“ずっと”だ。

たぶん私は、人を殺した事実にとても恐怖している。

血を見るのが怖い。死んでいく人を見るのが怖い。だけどなにより

——人を殺すことに慣れてしまうことが怖い……。

この目が恨めしい。

この濁った目が、人を殺すことに特化しようとする目が……。

「——っ!!」

- - パチンツ!

私は片手で自分の頬を叩いた。

少しだけ、感傷的になりすぎていたのかもしれない。

叩いた頬がじんじん痛むが、この痛みはその想いを振り切る起爆剤がわりのものだ。

「……」

ザッ、ザッ、ザッ、と誰かが砂を踏み歩く音が聞こえる。

……何を考えていたのだろうか？

私に迷う必要はないハズだ。

それは確認するべきことでも後悔するべきことでもない。

「少し……いいかね？」

声が聞こえる、聞き慣れない声だ。

だが私はこの声の主が誰なのかも、この問いかけをするだろうということも、判っていた。

その人物は、私がスコップ越しに見なければいけなかった距離を、普通に目視してしまうという規格外な存在だ。

それに、こちらに向かってくるのに何も目的がないというのはありえないだろう。

そこまで考えを終えたところで、私は閉じた目を開け返事を返す。

「……はい」

そこには白髪長身の男が立っていた。

予想通りの人物だったため、私に驚きはなかった。

後ろには少佐もいるが……今は別にいいだろう。

「……」

——『鷹の眼』は標的を確実に見据え、狙い撃つ。ただひたすらに、正確に、機械的に行う。それが私の行うべき事。

自分の考えるべき事、その事を再確認した私は前に立っている男の顔を見た。

……そういえば、あの少年は助かったのだろうか？
ふと、そんなことを思い出しながら。

——若い。

確かに若いとは思っていたがこれほどまでとは。

女性と言うより少女と言うべきかもしれない。

どちらにしても、その境目の歳ぐらいでしかないだろう。

普通このくらいの歳の女の子は学校に通い、友人と勉強や恋愛に励むものであるはずのだが……、何を間違ってこんな所に、こんな……血塗られた場に。

「やはり、リザ……か」

急に背後から聞こえてきた言葉によって、私は意識を前方に戻した。思考することに没頭しすぎた。

その声が聞こえるまで、私は意味のない時間を過ごしてしまったのだろう。

見ると、前の少女も怪訝な顔をしている。

どうやら少し疲れているようだ。

頭が活発に働かないようで、一つの事に気を取られてしまっていた。私は自身に渴を入れる為に小さく息を吸い——言葉ごと吐き出した。

「先程の狙撃、見事だった」

「……」

「その歳でそこまでの腕を得る為には、かなりの鍛錬を積んだのだろっ?」

「……いえ」

ありきたりだが素直に思いついた称賛の言葉を送り、少女の反応を窺うことにした。

無駄に警戒されるわけでも、隙を見せるわけでもないように行動したつもりだ。

しかし、目の前の少女の反応は芳しくない。というよりも困惑していると言った方が正しいか。

それもそうだろう。自身が狙い撃った相手にその腕を讃えられたのだ、侮辱とも取れる。

「」
「」

沈黙が痛い。

やはり疲れているらしい、思うように場が持たない。
どうしたものか……、そう考えたところで、思いもよらない方向から言葉が飛んできた。

「一つ、聞かせてください……」

前方の少女、つまりこの微妙な空間を私と共に作り出した狙撃手だ。

「——む、なんだね？」

まさか向こう側から話しかけてくれるとは思わなかったため、反応を返すのが少し遅れてしまった。

先程の不意打ちといい、彼女は思いもよらない援護が得意なのだろうか？

私はどうでもいい事を考えながらも、目前の少女に意識を移す。

「……少し前に、ミッシ地区で子供を助けませんでしたか？」

ミッシ地区……というのがどこの地区なのかは判らない。

だが私が助けた子供と言えば、母親を見つけられたあの少年ぐらいだ。

自分の中で適当に当たりつけ、答えを返すことにする。

「確かに、一人だけ少年を助けはしたが、それが——あの狙撃手は君か？」

途中まで問いに答えたところで、不意に思い出した。

私と少年を狙っていた、あの狙撃手。

その狙撃手は、私が一睨みするだけであっさりと動揺を表した。
故にそこまで印象に残ってはいなかったのだ、忘れるなのというのが

酷だろう。

「はい。それで……あの子は？」

「ああ、私が助け出した後に、隣の街で母親を見つけたすことができた」

「……そう、ですか」

ほっ、と息をついてそう言う少女。

その息は安心する感情からくるものだろう。

心優しい者なのだろう、そう認識した私の視線は緩やかなものになっただろう。

しかし、だからこそだと、再び視線を険しくして彼女に話しかける。

「……君は——」

「おい！ 君たちは何の話をしている！？」

私の言葉の途中で、違う方向からの声が乱入してきた。

……間の悪い奴め。

そういう意思を込めて背後の男に視線を送る。

その視線を受けてか、男は少したじろぐ。

確かに一人だけ放置していたのは悪いと思うが、タイミングというものがあるだろう……。

私は冷ややかな視線を送り続けたが、少し間の悪い顔をした男を見て、一つため息をついた。

「……彼女とは少し前に違う地区で会ったということだ。とは言え、スコープ越しに目があっただけだな」

「はい、あの距離から目視されるとは思いませんでした」

「……先程のこともそうだったが、君の視力はどうなっているんだ？」

私が簡単に説明してやると、彼女も補足の様に付け足した。

その説明を聞いてか、男はまるで化け物をみたような視線を送ってくる。

あまり、気持ちのよいものではない。

「なに、視力の良さは私の数少ない誇れる部分なのでね。ちよつとした反則も使っているのだが、鷹の目と称されたことがあることは飾りではない」

最初にこの世界に来たばかりの頃、私は自分の体の解析をした。

その結果として、体を再構成された影響か、それとも真理の作為的なものなのかは知らないが、全身への強化の類が使えなくなったことが分かった。

しかし、ここにきて幸いだっただのは、目だけの部分的な強化なら出来たことだ。

だから結果として、聖杯戦争時のクラススキルの効果までとは言わなくても、普通では考えられない距離の目視が可能だった。

「——っ！」

だがここで、びくつ、と目の少女が肩を震わした。

何事かと目を向けるが、彼女の視線は足元の地面に向いていて表情を確認することはできない。

私の言葉の中に何か変なものがあつたのだろうか？と、少し顧みてみるが、特におかしな点はないと思いなおすだけだった。

「あなたは……」

やがて少女はおそろおそろとこちらを向き、またもや呟くようなか細い声で言葉を発した。

……何かに怯えているのか？

そう推測してはみるも、肝心な“何か”の部分が私には分からない。故に私は次の言葉を待つ。どうやら私も関係しているらしいというのも、その理由の一つだ。

「その眼で……、どれだけの死を見てきましたか……？」

……成る程な。

こんな納得の言葉が、ふと思いついた。

それは彼女の言葉を聞き、先程の疑問に対してのおおよその答えを出すことができたことからくるものだ。

何に震えているのか、何に怯えているのかということ。

そして疑問を解消すると同時に、真剣に応えなければならぬという気持ちも浮き上がってくる。

「……さて、な。正直に言うところ、死を見てきた数など覚えてはいない。」

だが、これだけは確かだ。私は人の死を数え切れないほど見てきたし、数え切れないほど……人を殺してきた」

否、真剣に返答を返そうなどと思わなくても、私がこの事に虚実を含ませることはできない。
殺してきた者たちを冒瀆するような、そんな言動をすることは許されない。

「——っ、そう、ですか……」

私の返答に嘘など混じっていないと分かっているのだろう。
彼女はまたもや自分の身を震わし、消え入るような声で呟いた。
その声からは、私の返答に怯えを抱いているというよりは、予想通りの返答を得たという感情を見受けることができる。

「……君は、人を殺すのが嫌なのだろう？」

私は問いかける。

あいにくと、人の心を読むなどという器用なことは得意ではない。
しかし、この問いかけはおそらく彼女の心情を得ているハズだ。

「……そう、かもしれません。」

でも、私の眼も同じです……。あなたと同じく、何人もの人間を殺した眼……。もう、戻れない」

懺悔か、それとも慟哭か。

彼女の自分に言い聞かせるように放った言葉は、何を内包していたのだろうか？

……いや、栓なきことだ。そんな問いかけは何の意味も持たない。

「……戻れない、か」

「……はい」

私の呟きにも、彼女は肯定の言葉を吐いた。
頷き、きっぱりと言い切ったのだ。

歳不相応な覚悟、いや、この場合は諦めか……。

それらを抱く彼女は、どうしようもなく悲しそうに見えた。

「では何故、君はそんな戻れない道を行った？ 軍人になり、人を殺す道を選んだのだ……？」

私には、到底理解できないのだが」

「——っおい！」

私の問いかけに、先程まで黙って聞いていた男が反応する。

私の言葉を、無神経な言葉と取ったか……。

だがしかし、ここでこの問いかけをしないわけにはいかない。

これはこの男にもしたことで、私の譲れない意図も含まれている。

「私は……人を、護りたかった……、から」

「なおさら理解できないな。今、君が行っているのは『人を殺す』
という、むしろその目的に反したものだろっに」

「——っそれは……！」

「人を殺したくないのなら——最初から軍人になどなるべきでは
なかったのだ」

彼女の言葉が詰まる。

私が口にしたのは、彼女の決意の根本的否定。
おそらく彼女の最も強かった想いで、——彼女の最も悩んでいる
想い。

故に、彼女がこの言葉を否定することは難しい。

だが同時に、この問いから彼女は逃げてはいけない。

「もう、わかりません……」

「……」

「“紅蓮”の錬金術師殿にも言われました。『戦いに正当性を求めるな、自分を哀れむな。自らの意思で軍服を着た時から、既に覚悟はあったのではないのか？』、と」

独白は続く。

まるで、彼女が今までため込んでいた気持ちを全て吐き出すように。

「また、私が相手を撃ったときに達成感を抱いているのだろうとも言われました。」

私はもう、自分が何を思っているのか、何をしたいのかさえ……」

歳不相応な狙撃の腕、彼女はそれを磨くことで、多くの人を護れる
と思っただろう。

だがしかし、今の彼女の独白はどうだ？

この現状——自らの狙撃の腕を、人殺しのために使っている彼女は、自らの目が虚ろになった少女は、

「——わかりません」

こんなにも、悲しそうではないか……

「……私もその錬金術師の言動の一部には賛同する。

自分を哀れんだところで、死んだ人間は返ってこない。戦場でそんな奴を見たところで、目ざわりなだけだ」

だが、そんな彼女にだからこそ、間違っていると感じたことは言う。そうでなければ、またこの少女は繰り返し返す。人を殺し続け、自分を責め続けるだろう。

そして私の言動を聞き、少女はまたもや肩を震わし、男は私に向けて非難の声をあげようとする

「君はっ——」

「——だが、私は君がそうだとは思わない」

——よりも早く、私は自らの放った言葉を否定した。

「……え？」

彼女が疑問の声をあげる。

講義の声をあげようとした男も、放とうとした言葉を抑えた。

両者に共通している点は、手のひらを裏返したような態度を取る私に、困惑しているということか。

「確かに、そいつの言動の一部には賛同すると言ったが……私には、君が楽しんで人を殺しているようには到底見えない。

それに、君は自分を哀れんでいるのではなく、人を殺したという罪に真剣に向き合っているだけだろう？」

事実、彼女の語った錬金術師の言動には私も賛同する部分もある。だがそれら全てを認めることも、私にとっては決して出来ないことだ。

人を殺す事を楽しむ？　は、そんな事をこの少女が思うわけがなかろう。

なにより、私は今まで数え切れないぐらい人を殺し、それこそこの少女や男よりもはるかに多くの人間を殺してきたが——楽しいと思ったことなどなかった。

それに、私は彼女の暖かい心が不要だとは決して思わないし、むしろそういう心こそが人間には必要だと思っている。

「……もしそうだとしても、私はもう戻れません。私の眼はもう、殺人者の——」

またしても彼女は、自分を責めようとする。

自分が罪を負ったと、自分は決してしてはならない過ちを犯したと。確かに、その心掛けは尊い。

しかし、その後ろ向きな考え方だけでは誰も救われない。

彼女が殺した者たちも、救いたい者たちも、自分自身すらも……。

「――戻れないのなら、前に進めばいいだろう？」

故に伝える。

足を止めている若者が居るのなら、その背中を押してやるのが先達の者の役目だ。

……いや、くだらない言い訳はよそう。

私はこの少女に、こんな所で終わって欲しくない。確かにそう思っている。

私は目の前に救える人物が居るのに、それを見捨てることはしたくないのだ。

私の発言を受け、彼女は思いもよらない言葉を聞いたとばかりに、その目を見開いた。

「私は一度立ち止まった。いや、自分自身の存在を消し去ろうとまで考えた……」

私の唐突な語りだしに、彼女は見開いた目を困惑の意思へと変化させる。

いや、私もか。

いつから私はこんなに感情的になったのだろうか？

「だが、それは間違っていると気付かされた。逆に、私の行ってきた事……いや、私の想いは、間違いではなかったということを。

故に私は誓った。前に進む、これから頑張っていく、と」

「……」

目を瞑り、自分自身の言葉を一つ一つ、反駁するように呟いた。
私が殺してきた人々の事は覚えている。救いたくても救えなかった、
そんな人たちが居たことも……。

だが、そんな私でも救えた人々が居たのも事実。あの笑顔を護ることが出来た、そう考えるだけで何度でも確信することができる……

——私は、間違えてなどいなかった。

「その男もそうだ。そいつもまた、覚悟を決め前に進むと決意した」

黙って聞き入っていた男へ指を指す。真剣な表情で、まっすぐな目をした男を。

こいつも私と同じ、前に進むことを選んだ男。

それは、今の男の表情からも明らかだろう。「……私も進むことができるでしょうか？ こんな眼をした私にも、前へ……」

相変わらず自信なさげな少女。

だが、その言葉に少しの希望が見え隠れしていること、その事は私の気のせいではないだろう。

「私にそんな事を知る術はない。それを結果として知ることができるのは、自分自身でしかない」

「……」

「だが、君が前に進みたいと言うのなら……

自己を持って、確固たる自分の意思を。

何事にも揺るぎない想いを。

全ての迷いを貫くことが出来る、信念を。

この戦場という場ではそれを失う者が多い。だが、それを乗り越えられた人物が、この世界を変えていくことができるのだ」

ふと、私は何を言っているのだろうと疑問に思った。

自己を持って？ —— ク、私がその言葉を言う資格があるのか？

切嗣の理想に憧れ、自らという物が空虚だった私に。

自分を見失い、過去の自分を殺そうとした私に……。

……いや、だからこそ言うのだ。

自分に言い聞かせる為にも、この言葉の重要性を知っているからこそ。

「君の眼は、私たちの眼は……」

殺人者の眼。

よく言ったものだ。もしそんなものがハッキリと目に映るのなら、その眼はどの眼よりも恐れ、忌避されるだろう。

だが、自分を信じる。それが出来たのならそれは……

「——自分自身を見据えることが出来るかどうか、そこに意義があるのだ」

——それはきっと、自分でも誇ることができる、強さを持った眼になるだろう。

第五話 鷹の眼（後書き）

読んで下さって、ありがとうございました。

よければ感想やアドバイスなどもよろしく願います。

更新は、もうちょっとしたら少しは速くなると思います。

これからも、私がこの話を続けることができれば、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493j/>

等価交換の世界の中で

2010年10月8日11時41分発行